

ミルトンの為に辯ず

(「失樂園」に現われた彼の宗教觀の弁明)

山 本 協 一

一

聖アウグステイヌス (Saint Augustine) が西紀五九七年にロマ教皇の命により英国に渡来してカンタベリー (Canterbury) に英国キリスト教の基を定め伝道活動を開始して以来一五三四年にヘンリー第八世 (Henry VIII) がロマ教皇との関係を絶つまで九百年余りの間英国民はロマ・カトリック教会に属して居た。同年彼は英国国立教会 (The Church of England) を創設して主長令 (The Act of Supremacy) を發布して教会の最高權威を掌握した。此教会を正式には英国聖公会と呼ぶ。併し之は単なる政治的分離であつて、新興せる英国教会の信仰箇条、礼拝諸式、制度、慣行等には殆んど何等の変化も無く、唯ロマ・カトリック教会特有の教義たる教皇至上主義、教皇無謬説、煉獄説等を否定したのみで有つた。そして其他の内実は旧態依然たるものであつた。

ヘンリー八世に次で王位に登つたエリザベス女皇 (Queen Elizabeth) は一五四九年統一令 (The act of Uniformity) を公布して公禱礼拝式の統一を計つたが、之は外部的形式上の劃一を企図した丈で、何等信仰の根本問題にも

ミルトンのために辯ず

核心にも触れた事ではなかつた。其後更に一五五二年と一六六二年の二回に亘つて統一令の勵行が策せられ、峻厳なる法的措置を以て鋭意国立教会公禱礼拝の外見上の形式統一が推進せられたのであつた。併し之も結局教会生活の外形を整備劃一化するに止まつたのみであつた。

上述の通り英国にキリスト教が伝来して以来約一千年を經過し、其長年月間に亘つて山積した教会内の悪弊は容易に除去せらるべくも無く、幾多敬虔の信徒は無限の不満を抱き、教会の改革を熱望して居た。

此頃熱心敬虔なるジョージ・フォックス (George Fox) と云う一人物が現われて一六四七年に友会派 (The Society of Friends) を創設し、制度化したる組織教会を離れて、専ら「内在の光」(the inner light) に依る純信仰生活の必要を強調して多数の共鳴者を得、隠然たる一大社会勢力となつた。之は腐敗墮落せる英国聖公会に対する反動現象であらう。

又一五五九年ジョン・ノックス (John Knox) はジュネーヴからスコットランドに帰り、ジョン・カルビン (John Calvin) の信仰を宣伝鼓吹し始めた。そして其が次第に英国聖公会に浸潤し来り、終に一六四八年にはカルビンの信仰を盛り込んだウェストミンスター信仰告白書 (The Westminster Confession) が英国聖公会の公認信条となるまでに至つた。而して此のカルビン信仰を信奉する人々の中には、ロマ教会から伝来して英国聖公会に其俣存続して居た多くの信仰上の不純分子を駆逐し、迷信分子を打破し、教会を清め、名実共に相応わしい純粹な新教々会 (the Protestant Church) たらしめんとした極度の改革要望の分子が在つた。彼等は道德的に身を持する事端正峻厳であり、公禱礼拝式の單純化の要を高調した。彼等が心身の純潔を極度に重んじた所から、時人は彼等を綽名して「清教徒」(The Puritans) と呼んだ。勿論輕蔑の呼称であつた。

ミルトンの父は此派に属して居た熱心家であつたが、不幸にして改革反対派の聖公会信徒たりし彼の父の激怒に触れて遂に勘当の憂目を見るに至つた。而して我が大詩人ジョン・ミルトン (John Milton) は斯る篤信熱心なる父の子としてこの世に生を享けたのであつた。時は一六〇八年十二月九日であつた。彼は斯る清潔、篤信、誠実、厳格なる清教徒の家庭に生れて、母の乳と共に健全なる清教徒精神を満喫して育つて行つた。加うるに彼は幼時から家庭教師として熱烈な清教徒神学者トマス・ヤング (Thomas Young) の教導を受け、斯くて幼少の時代から熱心に且つ深く神を信ずる心を植え付けられた。

一六五二年国立教会の聖職たるべき目的を以てケンブリッジ大学 (Cambridge University) のクライスツ・カレッジ (Christ's College) に入学し、一六三二年に卒業した。在学中のミルトンは敬虔、清潔、篤信、勤勉で実に模範的の学生であつた。併し幼時から懐いて来た聖職志願の念は教会の内状を知ると共に消え去り聖職按手式 (牧師任命式) を領せずして学窓を去つた。

三

大学卒業後、一六三八年四月半ば頃ミルトンは大陸旅行の途に上つたが、翌年八月一日頃、清教徒革命運動に参加の目的で帰国。一六四三年不幸なる結婚生活の第一歩を踏み出した。一六四九年オリバー・クロムウェル (Oliver Cromwell) 下の政府書記官に任ぜられ、堪能無比のラテン文を以て新政府の為に大活躍をなした。併し幼時からの過度の勉強と過激な政治活動の為に遂に一六五四年両眼共に全く失明して仕舞つた。妻死亡のため一六五六年再婚。

同じ理由で一六六三年三婚。初婚の妻は選択を誤まつた為に不幸極まる家庭生活に終始し、第二の妻も婚後間もなく早世し、第三にして最後の妻のみがミルトンのよき内助者となつた。第一の妻との間に生れし娘等は父の偉大を解するの明なくして遂に叛き去り、彼の家庭生活は大体に於て実に慘澹極まるものであつた。加うるに失明の大打撃を受け、其上に彼が一生の望をかけてその為に身命を賭した清教徒革命は王政復古に依つて空しき一場の夢と消え去り、同志の多くは処刑され、ミルトン自身も亦刑死の運命にあうべきであつたが不思議にその難を逃れ得た。

四

斯く彼は家庭生活に敗れ、事業に失敗し、健康を害し、子女に棄てられ、友人同志を失い、貧窮に陥り、年齢は老い、現世的には全く零落の絶下に落込んだのである。而して此一大逆境の中から生れ出でたものが実に「失樂園」(Paradise Lost)の一大雄篇であつた。幼時母の乳と共に吸収し、少時トマス・ヤングに鼓吹せられ、青年時代の光明となり、壮時人生の波瀾万丈の中に熱火の鍛錬を受けたミルトンの清教徒的信仰は、今彼の老年に及んで此一大宗教詩を産せしめた。而して彼は此詩に依つて独一、全能、全義、全愛、全知の神の、その創造し給える宇宙と人類とに現われた摂理の偉業を歌い出でんと欲したのであつた。彼祈つて曰わく、

What in me is dark

Illumine, what is low raise and support;

That, to the highth of this great argument,

I may assert Eternal Providence,

And justify the ways of God to men.

私のうち暗きかがやかし、

低きを高めかつ支えよ、

そはこの大いなる詩題の高さに、

永遠の摂理を私は証しして、

人類に対する神の途を義しとせん為に。(第一卷二二—二六行)

此言は実に此全詩の性格を端的に表現して居るものであつて、之を聖書の言辭を以て言えば、
「すべてのものは神より出で、神によりて成り、神に歸す。栄光永遠に神にあれ」(ロマ書十一章卅六節)

との聖言の註解である。周知の事ながら次に其内容を概言すれば、神は絶大の愛を注がんとその目的を以て全宇宙を創

造し、其中に人類を住わせて、其全熱愛を之に注がんと欲し給う。然るに悪魔が起つて其聖言を妨げ、始祖アダムの妻エバを巧に誘惑して神命に背かしめる。エバは愚かしくも其巧計に陥り、夫アダムをも共に同罪に陥らしめる。斯く神の誠を破つた為に樂園を追はれる。併し其処罰実行と同時に神は神の義の要求を完全に果すべき一人の人をアダムの遠孫中から起し神命背叛に依つて破られた神と全宇宙との平和を完全に恢復すべきを約し給う。アダムは追放に先立つて神の意図の全貌を予示せられる。即ち創世記の初から黙示録の最後迄の内容の鳥瞰図を示される。大洪水。ノア一族の救助。篤信の義人アブラハムの召出。選民の育成。其隆昌と滅亡。神子キリストの降誕。贖罪の一生。復活。昇天。教会の成立。成長。隆盛。墮落。世界一般の墮落。キリストの再臨。悪魔の最後の滅亡。最後の審判。新天地の出現。信者の永遠の新生活等が示される。斯て全巻が終る。即ち之は聖書の要約でありミルトンは固く之を信じて居たのである。

五

以上述べた所に依ても明かな通り、ミルトンは此詩篇によつて神に対する彼の信仰を心ゆくばかり表白せんとして之を書いたのであつて自己の詩才を示さんとしたのではない。唯偶々彼に異常の詩才が恵まれて居た為に其天才を用いて信仰表白の具としたまでである。従つて何処までも内容が主であつて形式は従である事は言をまたない。而も此点を特に高調する必要ありと筆者は信ずる者である。

ミルトン時代の英国民は欽定訳聖書 (The Authorized Version of the Bible) の完成 (一六一一) に依り全国民挙つて之を耽読し、之を「神の言」として無上の権威を認め、其記事に絶対の信頼を置いたものであつた。斯る環境に人となつたミルトンも勿論同じ聖書觀を懐いて居たのであつて、「失樂園」に歌われた内容は単なる神話的又は詩的空想の記事では無く、飽までも厳正なる神の大経綸の記録と觀じたのであつた。彼は三百四十年余を隔てた現代人たる我等にとつては到底思惟し難い程の白熱的純一の信頼感を以て聖書に対したのであつた。我等は特に此一事を心底に銘記して置く必要がある。

六

斯て此大作は公にせられた。年経ると共に次第に其価値が高く認められる様になり、十九世紀の初頭頃にはロマ・カトリック教徒、国教徒、非国教徒の別なく一樣に之を読んだ。仔細に検すれば彼等すべてに取つて怖ろしい異端分子が包蔵されて居たにも拘はらず大体に於て彼等に共通の信仰を表白せる部分が多量であつた為に異端分子に気が附かなかつたのである。

所が「失樂園」が次第に広く読まれるうちに、此詩中には当時の英国のみならず全世界、全時代のキリスト教界に取つて重大な異端思想を包蔵して居る事が発見されて来た。其はミルトンの「祈祷形式無用論」と「教会無用論」である。彼に依れば祈りは一定の形式を要せずとの事である。

And other rites

Observing none, but adoration pure,

Which God likes best

神の最も好み給う純なる崇敬の外は何の儀式をも要せず、(第四卷七三六行—七三八行)

之は聖書に在る「神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもて拝すべきなり」(ヨハネ伝四章二四節)の語に基づくものであるが、公禱礼拝式統一令を以て礼拝式を嚴重に規定し、法律上の罰則まで設けて違反者を処罰する事をも敢て辞せざりし英国々教会の態度とは正に正面衝突するものである。否、事は其に止まらない。ミルトンは更に云う、

Lowly they bowed, adoring, and began

Their orisons, each morning duly paid

In various style; for neither various style

Nor holy rapture wanted they to praise

Their Maker in fit strains pronounced, or sung

Unmeditated.

彼等低くかがみて拝し

朝ごとに様々の姿勢にてをせむる

祈祷をはじめる。

けだし造物主を讃むるに

様々の姿勢や聖き恍惚をもて

ふさはしく言い出で又は作らずして歌う。(第五卷一四四行—一四九行)

即ち祈祷には特別の形式を要しない。真実の祈りは或場合には「前以て企らまぬ歌」ともなり、楽器を要せぬ佳き詩ともなつて溢れ出づるものであると彼は云う。斯る徹底的な祈祷形式無用論が大異端論と認めらるゝのは当然である。

否、尚進んで彼は云う。

And now Saint Peter at Heaven's wicket seems

To wait them with his keys, and now at foot

Of Heaven's ascent they lift their feet, when, lo!

A violent cross wind from either coast

Blows them traverse, ten thousand reliques away,

Into the devious air. Then might ye see

Cowls, hoods, and habits, with their wearers, tost

And fluttered into rags; then reliques, beads,

Indulgences, dispenses, pardons, bulls,

The sport of winds: all these, upwhirled aloft,

Fly o'er the backside of the World far off
Into a Limbo large and broad, since called
The Paradise of Fools; to few Unknown
Long after, now unpeopled, and untrod.

今や天の小門に聖ペテロは鍵を持ちて
彼等を待つて居ると見える。

今や天の坂の麓に彼等が足を揚げる時

見よ！ 途端に烈しい十字風が

両方の岸から横ざまに吹くや

幾千里斜めに空中へと

彼等は頭巾、僧帽、僧衣など

着たものもろ共に投げとばされて

檻樓と化し、遺物、念珠

免罪符、特許券、宥恕令、布告書など

風に吹かれて皆高く舞い上り

世界の背面を越えて遙かに飛び

広大なる辺疆にゆく——その坂に

愚者の楽園と呼ばれ

後者にはあまねく知らるゝに至つたけれど

今や住むものも辿り行く者も無い。(第三卷四八四行—四九七行)

教会生活の功德を表する種々の標識を身に着けて其功德に依つて天国の門さして坂の麓に意気揚々と差しかゝつて来たものどもが突然吹き起つた大烈風に捲き上げられて中空高く舞い上り標識衣類は裂かれて四方八方に飛散し、彼等は無辺の彼方に吹き飛ばされて跡方もなく消滅し去ると云うのである。即ち制度化され、組織化された教団、修道院、教会等のものに対する反対意見の開陳である。カトリックと云いプロテスタントと云い、名は異なるけれども、いづれも教会制度の絶対必要性を高調する事に於ては変りは無い。欧米人(及彼等の教導を受けたキリスト教徒)に取つては教会なきキリスト教などは夢想だも出来ない事であつて、キリスト教に団体組織を要せずと云う意見は異端中の最大異端と認めらるゝ所である。廿世紀文明の斯く迄進んだ今日でさえキリスト教に対して組織体の無効、無用を主張するものあらば十字架に磔けて八つ裂にしても尚足らぬ程の大異端と思われるであらう。

元来ミルトンは教会制度に就いては監督制度の如き専制々度を排し、長老制度を以て之に換うべしとの意見を持して居た。即ち会衆に依て選挙せられたる数名の代表者(長老)合議の上教会の運営を図る制度の勝れるを主張した。之は英国伝来の教会制度に対する反逆であつて、斯る改革主義者は英国教会に取つての異端分子、危険分子であつた。それだけでさえ民衆の憎悪の的となるのに充分であつたのに、更に進んで、三百五十年もの昔に於て前述の通り制度組織の全面的無用論を高調したのであるから、彼のピューリタニズムが当時は勿論今尚特に憎まれて居るのも当然であらう。「不愉快千万なピューリタニズム」と罵られて居るのも単に彼の抱いて居たピューリタニズムに対する憎悪のみでなく、国教会の伝統、制度に対する彼の異見が此激しい憎悪を招来したのではあるまいか。

七

前述の通りミルトンの信仰は英国々教会の組織、制度、慣行等に対する見解に関しては異端的であり、聖書全卷に亘つて啓示せられたる内容即ち全宇宙、全人類に関する神の経綸、摂理等を確く真理と信じ、聖書は神が人類に下したまいし契約の書と観ずる限りに於て正統的であつた。そして此信仰、此聖書観は初代キリスト教会から伝えられた世襲遺産であつて一千九百余年前の往古から世々代々受け嗣がれて今日に至つたものである。之はカトリックの大神学者アウグスチヌス、プロテスタントのルーテル、ツウイングリー、並びにカルビンを経てミルトンに及び爾來三百四十年後の現代に於ても全世界七億に余るキリスト教徒を支えて居るものであつて、此点に就てはカトリックもプロテスタントも毫も変りはないのである。故にミルトンの聖書観と信仰は全世界のクリスチアンに依て懐かれ、此に基いて澆漓たる実行力が生れてその現実生活が指導されて居るのである。

八

然るに世にはミルトン神学は既に亡びたとか、彼の信仰は単なる過去の事で今日は消滅した迷信であるから「失樂園」は単なる芸術品としての生命しか無いと主張し、極力ミルトンの信仰を否定する事に熱心な人々がある。

一昨年一月発行の「英語青年」第百卷第一号に我国知名の英語、英文学者七十一氏に依て選出せられた「英米文学十二選及五十選」なる表が掲げられて居る。而して其第一位を飾つて居るものは実にミルトンの「失樂園」である。併し此選定をなされた諸名家の中にも明白にミルトンの信仰をピューリタンの消滅と共に過去の遺物となるものと断じ、「失樂園を唯単なる文学としてのみ味うべき」事を説かれた人が在る。

九

ところが一方では最近我国のある知名の学者が欧米諸国を視察し、生々たる信仰生活の行はれて居る現状を觀て感歎の声を放つて居られるといふ事實がある。(一昨年三月十日發行毎日新聞所載伝染病研究所長長谷川秀治氏の「欧米の宗教」を見よ)而して此信仰こそ実に前述の通り三百年前、否、初代教会以来の古い信仰なのである。かくてミルトンの信仰は現在も生々として榮えて居るのである。現代ミルトンの信仰の死滅を高調する事に熱中せる人々は此目前の事實に目を閉ぢ耳を塞いで居る人であらう。なるほどピューリタンは亡びた。併し之は十七世紀の英国歴史が生んだ、あの時代の特産物であつたから時代の推移と共に過去のものとなつたのは当然である。併しピューリタンの信仰内容は今日迄も榮え続けて上記の学者を感歎せしめた程の成果を現に結んで居るのである。ピューリタンという団体は消えても彼等の信仰は存続して居るのである。団体の消滅を信仰の消滅と早合点するのは早計である。殊に或歴史家の主張する所に依れば十八、九世紀に亘る英国の大をなさしめた原動力、更に北米合衆国を起した原動力はミルトン信仰の源泉たりしカルビン神学であつたと云う。若し此主張が正しいものとすればピューリタン信仰の過去及現在に亘つての成果が如何に大であるか知られるのである。

十

ミルトンの「失樂園」は、其構想と文体の上では比類まれなる芸術作品である事は衆人の略一致した批評であるが、其信仰を嫌うて否定する人、異端分子の為に之を厭う人、ミルトンの清教主義を惡む人などが、「失樂園」の文学作品の偉大さの故に、憎まれ、厭われ、嫌われるミルトンを愛さるるミルトンたらしめんが為に「彼は純乎たるピュー

リタンにあらずして、ピューリタニズムとルネッサンスの生んだ子である」と云つたのをはじめとしてミルトンのピューリタン性を奪うための努力が払われて居る様であるが、思わしい成功を見られぬ様である。之等の人々は結局ミルトンを単なるヒューマニストに改造し度い様子であるが其成果は如何であろうか。

ミルトンは前述の通り骨の髄まで純乎たるピューリタンであつた。而るに幾分なりとも彼の此生命的分子を奪はんとするが如きは果して彼に対して忠なる態度であらうか？

又或学者はミルトンに証明し難き汚名を着せて、一箇の融通のきく人物を作り上げようと試みた人もあつたが失敗に歸した。十七世紀の峻厳なピューリタンたりしミルトンを現代の好みに合う様な人物に改造する事は不可能である。

学者は今やミルトンの信仰の由来、意義がミルトン自身の生活と、同時代の知的生活に如何なる関係を有するかと云う問題を研究して居るとの事である。願わくば此新しい研究は依つてミルトンの眞の姿が明らかにせられん事を切望する次第である。

十一

最後に一言附加し度い。ミルトンは第三卷の三八三行―三八四行に、

*Thee next they sang, of all creation first,
Begotten Son, Divine Similitude.*

次に汝を歌う、造化の始よ、
生れ給える神の聖子よ、

神の像よ。

と歌つて居る。之はコロサイ書一章十五節に Who is the image of the invisible God, the firstborn of every creature. (改正訳では all creation となつて居る)。

「彼は見得べからざる神の像にて万の造られしものゝ先に生れ給えるものなり」から来たものであるが、ミルトンは之を略して of all creation first と云い、又彼のキリスト教々理論に the first of the whole creation と云うて居る。そこで此一句を捉えてミルトンはキリストを被造物の一と観じたと解し、所謂「ミルトンのアリウス主義」(Arianism) と云う非難を彼に浴びせかけて居る人々がある。コロサイ書の此一節をカトリック教会の公定英訳聖書 Douay Version は註して曰う。

The Firstborn, that is, first begotten; as the Evangelist declares, the only begotten of his Father. Hence, St. Chrysostom explains *firstborn*, not first created, as he was not created at all, but born of his Father before all ages; that is, coeval with the Father and with the Holy Ghost.

「先に生れ給える者」は即ち福音書著者(ヨハネ伝三章十六節)の「生み給える独子」と同義である。依て聖クリソストム(三四四―四〇七年)は「先に生れ給える者」を説明して「キリストは決して創造された者ではない。故に「最初に創造された者」では無い。キリストはすべての時代に先んじて父より生れ給える者、即ち父と聖霊と共に終始一貫して存在し給うたものである」と。勿論ミルトンはカルピン神学に立脚した人であつた故にキリストに就ては右の説明の通りに信じて居たのである。アリウス説はキリストの永遠存在を否認する説であつて第一回教会総会議が三二五年ニケアで開かれたのは此アリウス説を異端と宣言する為であつた事は周知の事実である。而るに斯る人々は自己の聖書知識の不足からカルピン主義のミルトンがアリウス説を抱いて居たという様な誤つた見方をしたものであ

る。

十一

約言すればミルトンは狭く、厳しく、清く、高く、深くして近づき難い人物であり、其人格の投影たる「失樂園」も亦近づき難き作である。ミルトン自身も此書が多数者に迎えらるゝ如き事は期待して居なかつたと云う。誠にミルトンはウァーズウァースがいみじくも歌いしように、

They soul was like a Star, and dwelt apart.

汝の靈は星の如くにして（遠く）離れて存したのであり、そして彼の「失樂園」は

Popular Milton has not been, and cannot be.

ミルトンは未だ嘗て広く人望を博した事なく又広く人望を博する事はありません。との言の如く、所詮少数の、彼と同じ信仰に生きて居る人のみに依て真に味読、味解さるるのではあるまいか。それは此書は単なる文学書でなくして寧ろ信仰表白の書であり、聖書の一大註解書であるから、又聖書を引用する事一千

百六回以上にも及ぶ本書は聖書の信仰なくしては到底解し得られぬ書であるから、之を要するに彼の信仰を度外視して単に彼の詩の構想の大や文体の美等に就てのみ論議することは、恰も人の人格や精神を無視して徒らに人の容貌風采や服装態度などに就て云々するのと同じではあるまいか。ミルトンを現代人に作り換えんとする企ては彼の人格を無視した無礼な行為ではあるまいか。彼の信仰を否認し、無視する事は「失樂園」の存在の理由を根底から否定する行為ではあるまいか。彼が巻頭に歌つた

To the highth of this argument,

I may assert Eternal Providence,

And justify the ways of God to man.

との言が現に存して居るにも拘わらず、彼の意図を無視する事は彼に対する大なる侮辱ではあるまいか。彼に対して証明し難い汚名を冠するは不埒極まる行為ではあるまいか。之等はすべて狂愚の沙汰ではあるまいか。敢て識者の示教を待つ。(終)

本篇を草するに当り筆者は左の諸書から多くの貴重な教示と暗示とを忝うした。

Taine (H.A.): History of English Literature

Emile Degouis & Louis Cazamian: A History of English Literature

Douay-Reims Version of the Bible

越智文雄「ミルトン研究」

斎藤勇「英文学史」

Blunden (E):「英文学講義第一篇」

藤井武「樂園喪失」

繁野政璃 Paradise Lost (研究社英文学叢書)

畔上賢造「ミルトン伝」

英語青年第廿卷第五号—第七号

ミルトンのために辯ず

同 第百卷第一号

猶「失樂園」本文の訳は藤井武氏のものを借用した。